

180 駅伝 (2023 年 7 月 27 日)

フランスに来て、パリやストラスブールで駅伝大会が行われていることを知って驚きました。マラソンは世界的なスポーツですが、駅伝は日本独自のスポーツだと思っていたからです。世界陸上連盟が定める国際レースの基準では、フルマラソンと同じ 42.195km を 6 区間 (5 km、10 km、5 km、10 km、5 km、7.195 km) で走ります。一方、日本では、様々な距離の駅伝大会が開催されています。

駅伝が誕生した背景には、世界に通用するマラソン選手を育てたいと考えた人物がいました。日本が初めてオリンピックに参加したのは、1912 (明治 45) 年のストックホルム大会でした。この大会に、金栗四三は、マラソン代表選手として参加しました。しかし、金栗選手は途中棄権に終わり、世界との実力の差を見せつけられました。1917 (大正 6) 年に、京都と東京の間の 500 キロ以上の距離を 23 区間に分けて、3 日かけてリレーする競技が行われ、これが駅伝の始まりとなりました。この大会が成功したことを受けて、金栗は大学に働きかけて、大学生による駅伝大会を創設しました。

1920 (大正 9) 年に第一回大会が開催されました。現在は、東京箱根間往復大学駅伝競走 (通称「箱根駅伝」) として、関東地方の大学の駅伝チームが参加する駅伝大会になっています。東京から神奈川県箱根まで、往路 5 区間 (107.5Km) と復路 5 区間 (109.6Km) の合計 10 区間 (217.1Km) でタイムを競います。毎年往路は 1 月 2 日に、復路は 1 月 3 日に開催され、沿道には多くの応援が詰めかけ、テレビ中継もされます。



この大会は、距離が長いだけではなく、コースの厳しさでも知られています。東京と箱根の間は、歌川広重の浮世絵「東海道五十三次」で知られる東海道の一部です (写真右は、箱根宿を描いた浮世絵。)。当時の東海道と東海道を前身とする現在の国道一号線は少しルートが異なりますが、箱根を通過



することは変わりません。箱根は山の中にあり、昔から旅人にとって箱根は難所とされてきました。往路の最終ランナーは、約 20 キロの区間で、海拔 0 メートルに近いところから標高 874 メートルまで一気に駆け上り、アップダウンの激しい山道を走って、ゴールの芦ノ湖畔を目指します。そして、翌日は、別の選手が同じ道を一気に駆け下ります。歩くことも容易ではない厳しい山道を猛スピードで走る選手たちに、真冬の箱根の寒さにもかかわらず、沿道では多くのファンが声援を送ります。



駅伝の特徴として、バトンではなく襷（たすき）をリレーしていくことが挙げられます。襷は、元々は和服を着るときに袖や袂が邪魔にならないようにたくしあげるための紐です。駅伝では、大学名が入った襷を少しでも早く次のランナーは渡すために、選手たちは懸命に走ります。箱根駅伝は距離が長いため、時には首位と最終チームのタイム差が離れてしまうことがあります。首位のチームが中継所を通過して一定の時間（10 分から 20 分で区間によって異なる。）を経過しても通過できないチームは、繰り上げスタートとなります。中継所で待つ選手は、走ってくる前の区間の選手から襷を受け取ることができずに、仮の襷を付けてらなければなりません。実際のタイム差は後で計算されます。母校の襷をつなぐことができなかった選手の無念の表情をテレビで見ると、胸が熱くなります。毎年様々なドラマが生まれるため、箱根駅伝は人気の高い駅伝大会です。日本では 1 月 1 日から 3 日までがお正月で、新年を祝います。毎年お正月は、二日間で往復約 11 時間のレースから目が離せないという人も少なくありません。2024 年 1 月の大会は第 100 回大会ですので、さらに注目が集まることでしょう。

駅伝大会が開催される国が増えています。いつか、柔道のように、駅伝もオリンピック種目となる日が来るのでしょうか。